

国土審議会計画推進部会 住み続けられる国土専門委員会（第3回）（未定稿）

1. 日時：平成29年1月31日(火) 16:33~18:40

2. 場所：中央合同庁舎2号館11階 国土政策局会議室

3. 参加者

（住み続けられる国土専門委員会委員・・・1名欠席）

小田切委員長、高橋委員、谷口委員、玉沖委員、沼尾委員、藤山委員、松永委員、若菜委員

（国土政策局）

北本審議官、深沢総務課長、中村総合計画課長、高柳企画専門官 他

4. 内容

（山口）＜資料確認＞

（高柳）＜資料説明「住み続けられる国土の地域構造について」＞

（若菜委員）＜資料2 「住み続けられる国土とは」報告＞

＜ポイント＞（資料は委員限り、会場にはプロジェクターで投影。）

- ・ 事務局からの説明に沿う形で説明していきたい。
- ・ 東北に当てはめて考えると、仙台のような都市はあるが、その下の都市がぴんとこなかった。都道府県の都市は中核都市、それ以下は地方市、という形で整理した。
- ・ 改めて東北地方の特徴を考えると、50万人以上の中核都市は仙台しか無く、地方の中核都市も30万人でくくると、県庁所在地でもほとんど満たしていない。秋田、盛岡はぎりぎり超える程度だが、盛岡は広域合併してそのくらい。それ以外は地方都市ではなく地方市として表現したい。中核市は指定されているが、機能は西日本に比べると弱いという特徴が有るのではないか。
- ・ 今回の資料は地域構造についてのアンケートを基に考えた。生活圏域と言うことで、交通ネットワークで考えている。生活圏域として、どこへ通勤、通学、買物をしているか、と言うデータを取っている。先ほどの事務局の説明にもある「かんりゅう」についてと言うことで、田園回帰に関する意識調査を何回かやっていたので、それについて説明したい。
- ・ 資料の緑色は近くの都市、黄色のところは農山村。この5つの市町村データでお話したい。生活圏域は、北上市が人口9万人、中核市の盛岡までが一時間。岩手町も一時間でほぼ生活圏。農山漁村の方は盛岡までに時間かかる。青色は通勤、通学、通院、買物のそれぞれの行き先を都市ごとに整理している。青は自分の市町村。赤は地方市。単純に見ると農山漁村は中核市まで2時間以上のところは、通勤は一市町村に収まり、通学の方が流出して隣町まで行っている。通院、買物についても自分たちの街では収まらずに隣の市まで行く。緑は中核市だがそこまでは届かない。
- ・ 田野畑村の通学で見ると緑が2割有るがそれは下宿。左側は都市に近いところなので、事務局の説明と符合するが、北上は盛岡まで1時間以上かかるので、通勤、通学、通院は盛岡へは行かず、自分の街の中。岩手町は中核市に近いので、緑色の部分が増える事が分

かる。

- ・ 農山漁村は学校が先に無くなるから外に出る、通勤は意外と残るという話だったが、むしろ遠いので人口自体が流出しているのではないかと考えた。
- ・ 都市近郊の方は中核市が近いと引っ張られるが、遠いと地方市にいろいろな機能が小規模だが残るので、そこに行く。東北で考えると、西日本と違うと思うのは、中核市が育ちにくい。盛岡にも集結しないし、かといって仙台のような街もない。小規模のまま分散して残っているという印象。
- ・ 人口還流と言うことで、昨年地方創生総合戦略を作ったときのデータだが、このとき中高生に就職希望を聞いたところ、青色が中学生にどこに就職したいかという希望地を聞いた。赤は高校生。中核市の盛岡まで雫石が一時間、西和賀町が一時間半、田野畑は2時間以上の農村。
- ・ 雫石は選択が一つしかなく、他が複数なので単純に比較はできないが、右に行く（田舎の方）ほど町村内に就職したい子ども達が多い。田野畑は大変寒いところだが、中高生の3割が地元で就職したいと言っていた。西和賀は盛岡への希望が強く、中核市は仙台だがそこまでは行かず、仙台まで行くならいつそのこと東京へ、となる。
- ・ 雫石で多いのが、具体的には決めてないけど岩手県内、と言う選択になっている。岩手の子ども達は岩手県内なら良いのでは、と考えている様子。
- ・ 中学生の方がふるさと志向が強いが、高校生になると現実が見えてくる。中学生の段階から地元にある仕事のキャリア教育をしていないので、それをやっていくとよいのではないか。
- ・ 中核市から遠いほど、町村内や近隣地方市への就職率が高く、中核市に近ければそこでいい、となる。ふるさとが見捨てられる、という感じになるのでは。
- ・ 中核市は規模が小さく、中核市まで言ってしまう、と言うのが問題かと思う。
- ・ ふるさと回帰のデータについて、実例を示して議論の助けになれば。
- ・ 地域おこし協力隊について。思考は全く違うと思うが、多自然型居住地域に生きたい人たちはどういう課程で決意をするのか考えた。西和賀町は日本で一番ぐらいに人口がなくなると言われているが、11名の協力隊が居る。残った人にだけヒアリングしているので、事例を挙げてみたい。
- ・ 一人目は34歳。紫波町出身で東京に一度出て、商社で働いて西和賀に新規就農している。28歳の時に暮らすのは東京でなくてもよいという考えに至ったとのこと。
- ・ その後東日本大震災が来ており、どの方もそれがきっかけで、という形になっている。震災があつて、紫波町に帰らなくても、何か地域活動をしたいと言うことで、たまたま西和賀に来て定住を決意したとのこと。
- ・ 理由の一つとして、西和賀の街に尊敬するおじいさんが居て、そういう生き方をしたいと考えたとのこと。
- ・ もう1人はIターン。西東京市出身で日大芸術学部に行き、今はこちらに定住している。地域演劇という分野が有り、岩手は元々盛んなところで、震災の時に西和賀に来て、演劇合宿のようなことをやっているうちに協力隊に誘われたとのこと。ずっとではなくても

5年くらいは居ようか、と言う軽い考えできていたとのこと。なので10年先は分からないが、今はここに住んでいる。西和賀には他にはないホールや地域演劇の劇団があるようで、それに惹かれているとのこと。仕事は西和賀だけではなく、盛岡や京都などいろいろある。家は西和賀だが全国どこにでも行ける、という話。

- ・ 後の2人はUターン。2人とも出身が西和賀だが、兎に角出たかったと言うことで、東京、神戸に出て、10年ほど暮らしていた。東京で10年働くと「やりきった感」が出てくるとのこと。彼女はお盆の度に西和賀に帰ってきていたそうだが、あるとき星空を見て帰ってこようと思ったようだ。
- ・ いろいろきっかけはあるようだが、SNSで西和賀の若い人たちが地域づくりをやっているのを見て、嫌いな街だったのが変わろうとしている、という事を感じて帰ることを決断したという事。彼女も28歳だが、震災をきっかけにして帰ってきたとのこと。
- ・ 農村回帰の意向をまだ分析できていないが、一つはUターン、Iターンに分けるとUターンの人は一定期間都会の暮らしを経験するとやりきったという事で、田舎で暮らしたいと考える。きっかけとしては震災が大きいですが、ふるさとで頑張っている人が居ると言うことで、人との出会いというのが大きかったとのこと。
- ・ そういう人たちには仕事へのこだわりを感じる。希望が持てる仕事。自然が豊かで都会的な、という事よりは希望の持てる、地域のための仕事をしたいというこだわり。Iターンの人の方がそのこだわりが強い。居住環境と言うよりは、自分の力を必要としているか、そういう仕事があるか、という事を期待しており、自然があるから移住したい、と言う考えはあまり関係なかったようだ。
- ・ 東北の実態と言うことで報告させてもらった。
(山口) <資料説明 資料3-1, 2 「広井委員提供資料」>
(小田切委員長) 参考資料2の7, 8ページの補足説明をお願いしたい。
(高柳) <説明>
(小田切委員長) 資料の説明が終わったので今後はフリーディスカッションとしたい。
(谷口委員)
- ・ 三点述べたい。若菜委員の報告について。人の顔が見えているのがよいと感じた。人のつながりで動いていることがよく分かった。こういうことが大事と言うこと。
- ・ 二点目。例えば東北だと不便で北上に機能が残っていて、そういう情報が興味深かった。不便な方が良いのでは、と言う議論が一方でできてしまう。コンパクトプラスネットワークで議論した際に、ネットワークがよくなると小さな拠点がローカルでなかなか成立せず、集約されてしまう部分があった。スケールが違うものが出てきているのではと感じた。交通を不便にと言うことではなく、不便で人口が少ないところは人口一人あたりの価値がある、と言う考えに繋がるのではないか。選挙の格差にも繋がるかも知れないが、地方都市の10万人と都会の10万人では地方の方がいろいろな意味で重みがあるのではないか。地域構造の分析の中から、そういう考え方ができるのではないかと考えた。
- ・ 三点目。良い整理だと思ったのは資料の4ページ。攻めと守りに明確に分かれているが、津山や真庭のケースが書かれていて、昔岡山大学にいたのでその関連からのコメントだ

が、守りと攻めに単純に分けるのではなく、守っているうちに攻めになったとか、攻めようと思っていたら守れなくなってしまったとか、それが津山や真庭のケースではないかと考える。27 ページも津山の商業施設でアルネというのが有るが、地元の人が言っても何もないので「無いね」と言っているぐらい。ものすごく攻めていたがダメだった。巨大な再開発の形で商業的に勝ちたいと思って攻めたと思う。ところが、資料1のように岡山に出た方が交通的に早いとか、元々あった町の良さを守り切れなくなった側面があるのでは。

- ・ 真庭のケースは藻谷さんが里山資本主義で本に書いたので有名になったが、里山資本主義からするとあまりよくない話しだが、最初にここで渋沢寿一さんという方が委員長になって地域創生を始めたが、そのときには地域がもう守ることしか考えていなかった。ダイオキシンの問題があって木を燃やせないという話になり、林業がやっているところをどうやって止めるかという話でバイオマス発電に繋がっていった。地元としては大変だったと思う。そういう課程で回るようになり、攻めたわけではないようだった。うまく回るようになると攻めの形になったようだ。
- ・ この攻守の切り替えは野球のように裏、表ではなくサッカーのようなものではないか。見極めが重要。
- ・ 補足で P29。勝山の町並みが書いてあるが、小さな拠点の議論で真庭が良い例だと思うのは、3つの拠点から成立していて、落合という交通拠点、久世（くせ）というところが商業拠点、勝山が歴史拠点で林業もやっている。蒜山高原は別次元で、3つの拠点が相互補完を行っており、違うタイプの小さな拠点と言うことで参考になるのではないかと。（小田切委員長）とりわけ三点目の話しは特に参考になると思う。今回の津山や鶴岡の中抜け論についてはどうお考えか。（谷口委員）個人的にはよいのではないかと。きれいに二段階に分かれるかはまだ分からないが、昔から将来に向けて時間軸を見ながら検討をしていくと面白いのではないかと。（小田切委員長）段階差なのか、類型差なのか、そういうところが論点か。（藤山委員）
- ・ 私も3つほど述べたいが、その前に、住み続けられる国土についてわかり急いでもいいのではないかと。ここしばらくはしんどい状況が続くのではないかと。これはどうなっているのか、という事で、昔からの論理と新しい論理が錯綜するのではないかと。様々なものが過渡期に有り賛否両論が飛び交っている。それらを並べてじっくり考える、見えてくるのを待つということも必要ではないか。
- ・ 一つは、実際に住み続けられると言うことに近づいているのはどこかと言えば、今回出された国勢調査の結果で人口の持続可能性がやっと出たところだが、津山の周りでは奈義町、勝央町、西栗倉村が安定に近づいている。津山全体よりそちらの方がよくなっている。山形の酒田市周辺では三川町。いいところ取りかも知れないが。最後に八戸市の周辺では三沢との間のおいらせ町と六戸町。そこが定常状態になりつつある。
- ・ 住み続けるには生活実感。どういうところが住みやすいかと言えば、近いところになじみの店が2, 3件の拠点。3~40分かかる地方都市の中に5, 6件の人の顔が分かるすて

きな場所。そういうところが重要。大きな工場やスーパーがあるわけではなく、小さいが心地よい、そういうところが 30 代女性が起業しているところでもある。小さな土俵をやっていく必要があるのではないか。

- ・ 二番目の論点として、今は市町村単位でやっているが、さらに一番小さな拠点に対応するデータを重ねていくと浮かんでくるのではないか。国勢調査のデータが出たので、二次、三次が出ているが、その下が出ていない。そういう中でも田園回帰のデータを見ると 17 ページの資料では先ほど上げた町が転入超過になっている。そういうところを重ねていくとみてくると思う。
- ・ そういった 1 次、2 次、3 次をつなげていくと、実は集落地域だけでなく中枢都市の周りの郊外団地の方が大変なことになっているので、むしろ団地の小さな拠点、集落の小さな拠点、そういう攻めと守りを相互にやるようなことも見えてくるのではないか。
- ・ 広井委員の話も含めて、循環圏、経済圏の話。よく言われる FEC 自給圏という食料(FOOD)、エネルギー(ENERGY)、福祉ケア(CARE)。地域経済循環の圏域をやっているが、域内に取り戻すことで人が戻る。
- ・ 年収 300 万の話が合ったが、田舎に住んでいて費用がかかるのは教育費などの子育てと車。平準化とか出世払いになるだけで住める条件になっていくことが分かってきている。そういった小さなエリアでの分析とそこの経済論。ただそこで凝り固まるのではなく、すてきな拠点に中枢都市から人が来て、それも含めて経済循環、という話。
- ・ 今後人が住めなくなるのは沼尾先生も仰っていると思うが、東京 23 区内ではないか。お年寄りだけで DID 地区ができてしまう。1 キロ圏内に平均 4~5 千人、下手すると 1 万人。そうなると一番住み続けるには大変。
- ・ そうした対極の姿があって、しっかりと地方のポテンシャルや、介護分析等を見ると 2020 年代にピークアウトして介護について余裕が生まれ得ると言うのが、人口分析と介護分析をドッキングさせた私のプログラムでも明らかになってきている。そうした小さな地域でしっかりした実証的な分析を行って、全体で鳥瞰視するような形になっていけば、冒頭申し上げた「絵が整うのを待つ」という方が可能性があるのではと考えた。(小田切委員長) わかり急いではいけない、と言う考え方はこの委員会の共通の考えとして共有したい。先ほど新聞社の取材があり、住民台帳移動調査の新しいデータが出て、中国地方の社会増の市町村数が減少したことについてどう思うかと聞かれたが、端的に考えるべき事ではないと答えたところ。そういうことだと思う。

(高橋委員)

- ・ 若菜委員のお話は非常に参考にあった。信用金庫にいる立場として、例えば経産省で花火図を作るとリーサスの中では地方の産業の話になるが、商店街の中での還流に止まってしまうところがあり、地方都市でもある程度地域でものを作って外に出荷して稼いでくる機能が無いと、地域の中で雇用を循環させることは難しい。うまく地方の産品を仕立て直して世界に売り出せるモデルができた地域は外からお金が稼げて、一定程度の雇用が発生して地域の中で回っている。何千万も稼ぐのは難しいかも知れないが、300 万なら中小でもできる。そういうことを加えていくと、地域の産業を残す、そういうところ

ろで中核となる企業ができれば、その下請けの企業ができる。福祉関係の施設でもよい。周りにそれに関連した企業が必要となるため、雇用が生まれ、まちづくりができると考える。

- いくつかの市町村の地方創生に関する会議に出させてもらっているが、悪い話しではないのだが、ほとんどが隣の町との競争が目下の課題となっている。人の移動は隣の市などに行くのは当然なので、自分のところから出るところが気になるとか、取り合いになっている。1700 の自治体が全て人口が増えるモデルを作って取り合うのは少し違うのではないか。もう少し周辺で協力し合って広い視野を持つ方が、住民にはよいと思う。住民は道路の向こうが別の市とかあまり気にしないで生活している。具体的に言えばバスのカードとか同じにすればよいし、図書館も近くで住むし、住民票も近くで取れる、という話になる。
- 若菜委員の発表に若者の話があったが、高齢化の話で言えばもう一つは建物の高齢化。日本中の建物が金融で言うところの法定耐用年数を過ぎてしまい、鉄筋コンクリート 50 年の寿命を超えているところ。ただ、東日本大震災でも倒れなかった。日本中の金融機関は高度成長期に建物をたくさん作った方が効率がよかった時代に、税法上の減価償却期間で建物の価値を判断するようにした。結果として木造は大体 22 年。鉄筋コンクリートは 50 年。そこに価値を見いだせなくなった結果、不動産流通で言えば、日本は新築が 8 割で中古が 2 割ほどしかない。欧米では逆で、新築は 2 割で中古が 8 割。作り直して高いものを若い人に背負わせていく必要はなくて、使わなくなった建物の価値を見直してリノベーションしていくことで、半額で住宅が良い場所に持てる。都会も地方も関係ない。日本では中古の方に金融のお金が行かない場合が多い。他の国交省の委員会でもクラウドファンディングを使って地方の空き店舗を使うという話になっていく。うまく活用していくということも必要なのではないか。

(小田切委員長) 住み続けると言うことでは中身に関わる非常に重要な論点を頂いた。

(玉沖委員)

- 若菜委員の資料で改めて定性面の調査にも目を向けるべきと言うことを再確認させてもらった。違うものが見えてくるのが分かった。
- 中小都市に目を向けるという点で、離島のような閉ざされたところの方が楽しみ方を知っていたり、村に少ししかない店でコミュニティができていたりしている。
- 離島が海外と取引をするとなると越えなければならない弊害が大きく、独自のセオリーで解決しなければならない。貿易会社に頼っていると、ある日突然切られてしまうこともあり、そういうやり方では難しい。自ら地域の事情、好み、理屈に合わせたものは作って行かなくてはならない。
- 離島の方がやりやすいのでは、という事を中小都市の話聞いて痛感した。中小都市には食事、宿泊の場所がなかったりする。空洞化しているケースが多く、魅力という点では見つけづらいものが有り、交流人口という点では厳しい。独自の地域経済を還流させていくという点でも次の一手というところでは厳しいのではないか。
- ただ、一定の生活費を魅力的に得る手段があれば、経済的にも定住するという点でも可

能であると考えていて、日本の働き方のスタイルが正社員雇用、社会保険完備に固執しすぎであると言うことを痛感している。リクルート在職時に学ばせてもらったが、勤労方式、申告方式で言うと白色申告のような層を特別な働き方ではない、という事を伝えていく必要があるのではないか。欧米の雇用施策が進んでいる国では兼業方式をマルチプルジョブホルダーということで、小さなコミュニティほど小さな仕事を紡いで収入を形成していく必要がある。沖縄の座間味村でそういう政策を導入させていただいたことがある。

- ・ 事例を挙げられていたウーバータクシー。空き時間でやるものなので、空き時間をつなげて、小さな仕事を紡いでもう一つの仕事にする、と言うスタイル。これを浸透させていけないだろうか。
- ・ 資料1の4ページの守りの視点と攻めの視点。その分け方に感心したところだが、各地の様々な事例と重ね合わせると、守りは定住人口を対象に人を増やしていくよりこれ以上減らさないという定着というところも強いのではないか。攻めのところは交流人口に対する商売の要素が多分に関わっており、確かに攻めの部分である。逆に言うと、観光で商売できないので定住人口で頑張った、と言う海士町の事例。観光で成り立たなかったので定住で産業政策に結びつけていったところ。
- ・ 社会サービスのインフラ整備に目を向けていきたいと感じた。以前は電子マネーのSuicaは他の鉄道会社では使えなかったが、疑問を呈していたところ数年もしないうちに使えるようになった。民間の取り組みではあるが、社会サービスのインフラ整備という視点も必要なのではないか。

(小田切委員長) ライフスタイルの変化の視点を前面に出していただいた。続けて進めたい。
(沼尾委員)

- ・ 藤山委員からこれから長い目で見ていく必要があると指摘があったが、社会情勢の事で言われているのは、グローバル化と言われつつ各国が保守化してブロック化していくのではないか、という懸念があり、この国で我々が安全、安心に暮らしていくためには資源の問題、食糧の問題、どうするのとかという関係でもエネルギー、食料を作れるという環境をどう整えていくのか。さらにそれをどう流通させていくのか。農産物でも魚介類でも一定の流通の仕組みがあるが、そこも含めてどう考えるのか、どう変わっていくのか、と言う地域の持つ役割、経済循環のあり方も変わっていく可能性があるので、これから動き始めるのではないかと考えている。
- ・ もう一つ、人工知能の可能性。発達していく中で、10年後、20年後にどのくらい今の職業が残っているのか、仕事、職業が大きく変化するかもしれない。そのときに人間がやる仕事でどう所得を稼ぐかと言うことで、クリエイティブなところ、自然資源などに働きかけて新しいものを作るとか、様々なアイデアを集めて形にしていくとか、人間の役割が変わっていくときに、都市のような機能分担で機械的に処理していた部分がこれから危ぶまれていくようなことになると、直接自然に働きかけるような農産の方に仕事が増えていくのではないか、そのように前提が変わっていくのではないか。
- ・ そう考えた際に、資料1の中にあった中小都市の中抜けの話。広井委員提供の資料で

「歩ける」と言うことを仰っていて、中小都市では自動車交通に力点を置いて大都市と繋がるようにしてしまったところと、昔ながらの町並みがあるような街並みを残しているような中小都市があると思う。そこがポテンシャルとして決定的に違ってくるのではないか。

- ・ 商品を買うとか、エネルギーを買ったりとか、どのくらい近隣で作ったものを地元で売れるようなポテンシャルが中小都市にあるのか、無いのかと言うことで仕分けをしていく視点も大事なのではないか。
- ・ 政令市が近くにあると依存関係になるようなことが起こっていると思うが、おそらく単純な距離だけでなく、昔からの宿場町とか、生産地が近いとか、様々なことが関わってくると思われるので、もう少しファクトを出して仕分けると言うことが大事ではないか。
- ・ 所得を300万稼ぐという話があったが、以前、群馬県の上野村のキノコ工場に埼玉県から就職した人の話を聞いた。収入自体は埼玉の方が多いが、上野村はダムがあるため、交付税不交付団体なので、住宅、子育てなどが充実しており、コストが下がって貯蓄ができるようになったという事。そういう公共インフラを充実させることで、300万モデルというのがリアルに描ける可能性がある。どう公的に支援するかというところとの見合いで人が移るかどうかという話になるのではないか。
- ・ 都道府県単位の医療構想を作る動きが有り、県単位で二次医療圏などの役割分担がされており、そういうところでどう連携していくかなど、資源配分を考えていく必要。
- ・ 道路や歩けるということが重要になってくると思われ、歩いて安心なものが手に入り、そこそこの収入で楽しく暮らせるというのがキーワードになっていくのではないか。
- ・ そのための仕組みをどう作れるか。それぞれの規模の都市で作っていけるか、そこをどうつないでいけるか、という事を考えた。

(小田切委員長) 広い意味での生活インフラはきちんと考えていかななくてはならない。

(松永委員)

- ・ 前回から引き続き、議論を整理していただいて論点になったと思うのは、地方都市や中小都市という形や人口規模などでタイプ分けをしがちなところを、いわゆる県庁所在地からの時間・距離で中枢市、中小都市という形で大きく分類したり、それぞれ課題が異なる、と言う部分を整理していただいた。
- ・ 中小都市の置かれている課題は分かったが、高度成長期や全総の時代の施策は社会資本を整備して工業化し、雇用を作る、と言う工業化のモデル。国がそうしてきたことを受けて、現場では企業誘致を盛んに行ってきたのではないか。
- ・ 津山や鶴岡など、道路等の社会インフラと第二次産業が充実していて、住み続けられていた、と言うことではないか、それがここに来て、住み続けるにはこれまでと違う方策が必要になっている、揺り戻しが来ている、という事だと思う。
- ・ 若菜委員の指摘が事務局が出した課題とマッチしていて、東北の具体的な町村と中心都市との力学関係から述べられていたが、中小都市の課題というのは一言で言うなら企業誘致。それがグローバル化の中で国内では維持するのが難しくなり、今は人材を誘致してくる時代になっているのではないか。

- ・ 人材も地域おこし協力隊が半分残って定着して仕事を作っているが、半分辞めている。細かいフォローアップの特効薬はなく、企業誘致よりもそこのケアが難しくなっているのではないかな。
- ・ 小さいながらも新しい仕事、地方から失われつつあった新規就農、農家の担い手、伝統工芸の地場産業、新しい文化を創り出す演劇など、昔あったものを新しくデザインしていく、という事が特徴なのではないかと考えている。300万の収入がぎりぎりか、あるいはそのくらいあるとむしろ良いぐらいなのかもしれない。
- ・ 仕事の問題を人口環流ということで考えているのと同時に、住み続けられる仕事というのを今後焦点にしていく必要があると考える。
- ・ 先ほど沼尾委員が話していたが、やはり地方は車がないと生活できない。車社会を前提とした都市で、観光都市として魅力的なところはどこかと言えばなかなかマッチしない。逆に歩けるところが観光都市、文化都市になっているのではないかな。今までの中小都市というのは、ロードサイドにイオンなどのチェーン店が多く並ぶような画一的な風景になっており、それを変えていく、本来の姿を取り戻していく必要があるのかも知れない。
- ・ 米国は車社会だが、どういうことがキーワードになっているのかを調べると歩けるといのは日本より難しいが、確実に消費の側面から見ると分断されており、ウォルマートに行くような層と、高級スーパーに行く層と全く分断されている。日本でも分断されているが、もっとはっきりしている。車でロードサイドに行くのは低所得者層ということになっており、日本も段々そういうことになっているのではないかな。単に画一的でない、ものが提供されていけばよし、ということではないと思う。
- ・ 特に地域経済で注目されているのは、米国ではポートランドのように画一的な消費都市ではなく、Iターンしてきた人材が興したクラフトビール屋にビールを飲みに行くとか、そこでないと手に入らないというような、地域にある小さな店を目指していくことが今後は世界的なトレンドになっていくのではないかな。
- ・ そうした部分で先ほどの仕事の話と重なるが、米国の地域経済ではオーセンシティブ（authenticity）という言葉がキーワードになっている。簡単に言うと「本物」という意味で、「本物の町」を取り戻していくことが、地方の中小都市で住み続けるための条件なのではないかな。
- ・ そこに文化、観光の中心の場を作る、ということが一つの結論として提示されており、画一的ではない消費社会というのを築いていく事が必要なのではないかな。

(小田切委員長) 時間が来ているが 10 分ほど延長させていただきたい。

(若菜委員)

- ・ 三点ほど。一つ目は、藤山委員の分かり急がない、と言う力強いお言葉を頂いたのだが、中抜けの話は、実は東北に住んでいるとぴんときないところがある。中小都市についても違和感がある。もう少し丁寧に見ていく必要があるのではないかな。中抜けより違和感があるのは、東北は中抜けより分担が見られると思う。岩手の沿岸の方では、買い物は北の久慈に行き、学校は南の宮古に行くという形で使い分けされていて、中抜けと言うよりは分担されていて、中抜けだけの分析では難しいのではないかな。もう少し丁寧に

時間を掛けてみていく必要があるのではないか。

- ・ 二点目。都市と農村の整理の真ん中の部分を中小都市と表現しているが、そこもぴんとこない。都市なのだろうかと言うこと。学校しかない、買物しかない、都市とはなんぞや、と調べる時間が無かったのだが、敢えて新しい定義をするぐらいのことが必要では。その議論が続けていけたらと考えている。都市からしても農村からしてもいわゆる中小都市が必要、という事だと思うので、せっかく住み続けられる国土なので、中小都市の住み続けられる形はどうなんだろうというところを見極めていただきたい。
- ・ 都市は人口が集まっていてある意味で面的整備、農村も人が分散して暮らしているのでどうしても面的なものにはなるのだが、そのときに中小都市の正しい都市構造は何だろうと言うことで、今、交通分野でも社会インフラが高くなりすぎているところがある。でも人口は減るし、高齢化もしている。
- ・ 交通分野では「串と団子」というのが盛んに言われているが、成功しているところがない。持続可能な都市構造がやはり見えていないと言うことだと思う。
- ・ 車社会を前提としてはいけないと思う。中小都市で車社会を前提としてしまうと、どうしても経済的に圧迫してしまうし、交通を興そうとしてもロスが高すぎると言うことになる。ある程度公共交通についての議論も「串と団子」という形で、団子の部分に人口、ある程度の誘導など、都市機能について、こここそしっかりやるべき。そういう議論を今後は是非お願いしたいところ。
- ・ 私も中小都市に住んでいて、文化、観光と書いたが、もう少し違う何かがないか。紫波のオガールプロジェクトのような、リノベーションというか、花巻も若い人が廃墟になったビルを一棟なんとかしようということで活動している。
- ・ 資料にあった DMO、観光の前に中小都市で頑張ろうとしているのはシティプロモーションというか、イノベーションというか、自分の町で誇れるものは何か、という事をリノベーションしながら、人間味あふれる手作り感でやっていて、そこに人が集う、という感じになっている。
- ・ 観光と言うより、住んでいる人が自分たちで何かをやって楽しもうという形の方がよく見られるのではないかと思う。そういうところも是非書き込んでいただければと思う。
- ・ 文化・観光というよりは人が集まると自然発生的に面白いことが何か起こっているということ。それが今の 20 代から 30 代。若い人たちがそういう形で遊んでいて、そういう時代なのだろうと感じている。人が集まることで何かが始まる、という事を言葉で足していただきたい。
- ・ ウーバーが資料に出ていたが、農山村ではウーバーはそもそも人が居ないので、皆送って貰いたい側になってしまう。ウーバーが欲しいのは中小都市で、片手間で小遣い稼ぎができるところ。農山村ではそれができない。ウーバーというよりは「ライドシェア」と言う言葉に代えていただきたい。

(小田切委員長)

- ・ 皆さんから意見を頂いた。今の議論のとおり、今回提示の地方都市二類系モデル、細かいところはともかくとして、地方都市には何らかの差があることが確実に共有化できた

のではないかと。それが時間・距離による累計差なのか、周辺との関係による構造差なのか、あるいは場合によっては段階差なのか、ここについてはかなりの詰めが必要と思われる、そういうことが共有化されたのではないかと。

- ・ 中抜けという表現が正しいかどうかはともかく、少なくとも西日本で見られるそういう地域については新たな要素が必要で、観光・文化だけではなく、ライフスタイルであったり、新しい仕事であったり、あるいは人材誘致と言う新しい言葉も頂いたが、そういう新しい要素が必要と言うことが共有化されたのではないかと。委員の意見を参考にさらに分析を進めていきたい。

(高橋委員)

- ・ ウーバーの話は、内閣府の会議でも「シェアリングエコノミー」といっているので、そういう風に置き換えた方がよい。他の取り組みについても表現できると思う。

(小田切委員長) 今日の会議は以上としたい。

(以上)